# わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ⑩③

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

## ファジーな性

男性は女性のことがわからないと言い、女性は男性がわからないと言う。もともと別個の生物なのだから、理解できないのは当たり前。だからこそ男女の恋愛は成立するのかもしれない、とも思う。

一方で、仕事を軸に考えたとき、男女の垣根はどんどんなくなっている。つまり、性にとらわれず、仕事を選択する自由度はずいぶん高まってきているのだ。今や、男性にしかできない職業、あるいは女性にしかできない仕事は、少数をのぞきとても少なくなった。看護学校をみれば、学生の20％は男子だし、医学部の3分の1は女性である。配送や引越しといった力仕事の場で女性を見かけることがあると思えば、美容や料理の分野ではむしろ男性の活躍が目立つ。

生物の時間に学習したように、男女の違いは性染色体の違いで語られる。Xがふたつあると女性で、XYとなっていれば男性である。あるいは脳科学の世界でも右が男脳、左は女脳とまことしやかに解説される。脳の機能は複雑で、そのような単純な区分けはあまり意味がないといわれつつ、人々は占いにも似て性差でものをとらえようとする傾向がある。これも、理解しがたい異性を少しでもわかりたいと思う心理が働くからだろうか。

男性が女性のように着飾って客を接待する店に行ったことがある。驚くほどに女性っぽいことには率直な驚きがあるが、会話の面白さや気の利かせ方もまた絶妙であり、女らしさとはいったい何なのかと改めて思い知らされた。

その店に、蝶ネクタイを締めた黒いスーツの男性がきびきびと働いていた。どこから見てもジャニーズ系のイケメンである。ところが、もともと彼（？）は女性なのだそう。ということは、その店のスタッフが作り出した世界は、男女逆転の、めくるめく、夢うつつの空間だったというわけである。存分に飲んで食べ、ショーを楽しむことができたものの、ちょっとしたカルチャーショックではあった。

綺麗に着飾った彼らは「もっと女らしくなりたい」と言い、スーツ姿が決まっている彼女は「可愛い女性が好き」と打ち明けた。彼らにとって、今の社会はずいぶん生きにくいと思うし、これまでも辛いことは数え切れないほどたくさんあったに違いないが、素直な気持ちを口にする必死さには、ちょっと心打たれるものがあった。自分の欲求や夢を実現したいと願う気持ちに、男も女もない。そこにはただ、見かけの性区別に翻弄されてきた結果、自分の進む道を決めた潔さと真剣さがあるだけだ。

ときどき、「女性初の○○」といった話題が取り上げられることがある。○○にはパイロットだったり警視だったりメジャー投手だったり、が入る。そのような話題が取り上げられるのは、いかにこれまでが男性社会であったかの証だ。いわば過去を基軸にしたものの見方である。しかし、すでに男女の境目はファジーな時代に突入した。

性差を超えたところから、想定外のパワーや可能性が生まれることがある。世の中を変えるのは権力のある政治家ではなく、理不尽なことや曖昧さを受け入れては消化していく、逞しさに満ちた市井の人々なのだろうと思う。

イラスト・三浦義雄